

仏隨念

足田千秀

生物はオートポイエーシスの理法で成立している。オートポイエーシスとは自分で自分を自律的に作り出すこと。だから生物は新たな状況にも何とか対応して生き延びられる。予測不能性・偶有性によって、プリコラージュ（あり合せの材料、道具でものを作ること）されているのが生物だ。分子生物学者の知見に沿って今日のウイルス感染症を人文的に解釈すれば、過去のさまざまな疫病を凌駕し生き延びてきたように、人類はこの状況も生き延びてゆくだろう。ゆらぎは物の形象への始動であるが、無動は運動の停止・形象の完成であり、この停止はまた、形象の瓦解への始点でもある。

夏の夕暮れ、自然界は一瞬、無風の状態になるときがある。森も野の草も微かにも動かないこの一瞬の高雅さは、崇高の極みを感じさせる。私は観想する。この心がこの世で最後に見るこの世の風景を。この身の見る最終の世界の風景を。宇宙は宇宙の時間を生成し、自然界は自然界の時間を生成し、自然界の胎動の中に現象した生物は、その生物の主としての時間を生成している。

宇宙は生成・生劫じょうこう・壊劫えこう・空劫くうこうを無始よりこの方繰り返している。その繰り返しの中の一周期に、わたしたちは多様な生物の種のなかの一種としていま現在を生きている。嘆くなかれ。すべてはいつときだ。宇宙は生まれ消えてゆくが、そうであるがゆえに無常であり無我であり、その暴流の渦中に溺れる身の苦が、宇宙・世界そして社会現象の本質ではないのか。

ブツダの高弟の一人に頭陀行において第一人者といわれるマハーカッサパ長老の托鉢行の逸話がある。

わたしは座臥所から下って、托鉢のために都市に入って行った。食事をしている一人の癩病人に近づいて、かれの側に恭しく立った。かれは、腐った手で、一握りの飯を捧げてくれた。かれが一握りの飯を鉢に投げ入れてくれるときに、かれの手もまたち切れて、そこに落ちた。壁の下のところ、わたしはその一握りの飯を食べた。それを食べているときにも、食べ終わったときにも、わたしには嫌悪の念は存在しなかった。

(仏弟子の告白 テーラーガーター 中村元訳)

ここには慈・悲・喜・捨のすべてが入っている。

夏の夕暮れ、山庵は草いきれに瀰漫^{びよん}し僧堂の前の鬱蒼とした木の繁みの中に蜩が鳴いている。私の心は時空を超えて古生代の森の中に遊動してゆく。人類が出現する数億年以前の地球であるが、多様な生命が海に棲息していた。蜩の声調がなぜわたしの中の細胞の調律の動きのいずこかの琴線に触れるのか。言語化することは出来ないのだが、おそらくそれは言語以前の生命の営為^{いとなみ}の無言劇なのだろう。海から吹く微風が身体に触れると生命が細波^{さざな}む。生命が海に産まれた徴証なのだ。蜩の声調の響きのなかにわたしの心が古生代の光景へ遊動してゆくのも生命の神秘的な自然的胎動なのかも知れない。

ヒグラシの鳴動は一切の言語の虚構を解体し、「ただ生命がある」という境域にこの身体を静態させる。ただ、この状態が永續することはない。日が落ち微かな風が野の草を揺らし始めると、草々は生を吹き返し地は動きわたしの生命も動き出す。いのちは、朝に咲き夕に落下するむくげ槿の紫紅色の花の如くものだ。生への執着を捨ててこそ今日一日の生の愉楽が味覚できるものだ。

心は世界の真の姿を描くことはできない。心は世界を描く昨日を持たない。世界という虚像を作るのは知識であり心ではない。心は言語を把持することはない。そうでなければこのいのちはここにはない。この身と心のうちに宇宙の初めと終りがある。正常の極点に静安がある。静安に言葉はない。心は言葉を持たない。言葉は単なる脳の機能だ。苦がない事、それが幸福

の最大の定義である。そのような幸福は、なにかをして得られるものではない。無常・苦・無我を見解したのは心であり、心は一切の行いを見解している。行為することは無知を動力としており、それに伴って常に心が行為を観察しているのだ。行為した後後悔や悦楽が感受されるのは、心が重く拘かかわっているからだ。流れているのはいのちだ。いずこから流れいづるのか。量り知れぬ過去・未来・現在の三時から、生きているのは今この一瞬の心臓の一音一音のなか、この一音一音のなかに一切のいのちの記憶が共時している。それを憶念する。その一音に収斂されたいのちの過去・未来・現在の三時から開放される。そして、いのちでいのちを見ることができる。

仏陀は、人は死んでも心は死なずに残るのか、という問いには答えなかった。死後のことは人智を超えているし図り知れぬとは云ったが、心は残るとも残らないとも言説しなかった。仏陀は生への執着から離れていた、という事がこの由縁の真髓だと私は理解している。色即空とはなんだろう。色が分解し、原子から素粒子、クォークにそして絶対空に。しかしこれらは色の見解である。

心は物質だろうか。ある教派は極微の光子だという。この光子が心の元素だと。光子は物質だろうか。物質であるならそれは崩壊する。心は崩壊しない。物質ではないから。わたしは来世に存在するか、という設問に対するなら、このわたしという存在はここに在りながらすでに

未来としての存在である。わたしは一千年前の未来、五百年前の未来、百年前の未来を現在として生きているからだ。輪廻サンサーラを信じないという人が現代では圧倒的だが、輪廻は信じるとか信じないとかの信仰の次元の話ではない。無常を信じない人は決して生まれえない。生命が生まれるということは時間が流れているということだ。無常は地動説と同位の自然の法則である。わたしがここに生まれ存在しているということ自体が無常であり、すでに輪廻の証明ではないのか。輪廻という生の継続がなければ生命は生まれえないし、生まれた嬰兒は嬰兒の儘ままだ。無常があるから変化し、変化するから輪廻なのだ。輪廻をわたしの生まれ変わりと錯覚・幻想してはならない。リインカーネーションとは違う。希を捨てたとき希は達成する。どのような美しい音階にも感応しなくなったとき音楽は達成する。音階の究極点は静寂のさらに奥の静寂である。大数の単位は億・兆・京・・・阿僧祇あそうぎ・那由他なゆた・不可思議・無量大数となるが、小数の単位は分・厘・毛・・・彈指・刹那・六徳・空虛と続いて最期に清浄が究極とされる。

「なすべきことはすべてなした。さらになすべきことはない。」というブツダの感興の言葉はこの清浄点を示唆している。あらゆる方策を捨てたとき主客の壁は崩れ去る。「山は山にしてあらず」は四禅定の尋・伺の境地、而してのちに「山は山としてここに現存する」境地は喜・樂の境地だろう。禅定に入った心は捨、一境性へと慧を深めてゆく。脳が作る妄想を使い尽くし妄想の沼を涸れさせるのだ。

「比丘たちよ、土・水・火・風のない処はある」とブツダは云った。わたしたちが物象に囚われていたかぎり、滅尽定には至りえない。

無常を生きる。夏の日照りは火炎のように大地を焦がす。草も木々も日照りに耐えて、山景の色蘊しきうんは静座している。人は日蔭で落陽を待っている。蝉の声を満身に浴びて。生じた物は滅する。これは不条理だろうか。死なない生が有るとしたら、それこそ不条理で過酷なことではないだろうか。本当に永遠に生きたいのだろうか。「貪りむさぼを断じ、瞋いかりを断じ、痴を断せば、生を断じ老を断じ死を断ず。」これは仏の言葉だが、シースーパチャーラー尼は次のように述べている。

全世界は（欲望の火が）燃え立っている。

全世界は焼かれている。

全世界は焦がされている。

全世界は揺らいでいる。

（尼僧の告白 テーリーガーター 中村元訳）

ブツダの時代から二千六百有余年が過ぎた今日、人々の欲望は肥大化するばかりだ。豪華な生活を欲望して破滅への道を疾走する。ブツダはかく語る（ウツダーナヴァルガ）。

すべての幸福を得たいと思うならば、(幸福への)すべての欲望を捨てなさい。すべての欲望を捨てることによって、最高の幸福を楽しむことができる。望ましい対象に執着している限り、満足は決してやってこない。だから、賢明にも欲望を慎む者は、満足を楽しむ

(心の治癒力 トウルク・トンドゥップ著 永沢哲訳)

贅の限りを知悉しているブツダの言葉だからその含蓄の深みは計り知れない。よくよく肝心すべきだろう。さらにチベットのンガーキ・ワンボ僧は次のように述べている。

今生の富は、蜜蜂の集める蜜のようなもの。

集めても、それを楽しむのはほかの者。

親戚や友達の集まりは、客の集まりのようなもの。

ひとたびいっしょにいるけれど、別々の道を行く。

(心の治癒力 トウルク・トンドゥップ著 永沢哲訳)

再びブツダの言葉を引く。

依存する者には動揺があり、依存しない者には動揺がない。動揺がなければ軽快があり、軽快があれば屈服は起こらない。屈服がなければ、来と去は起こらない。来と去がなければ没と生は起こらない。没と生がなければ、この世にも、あの世にも、両者の間にも、ない。これが苦の終わりである。

(中部経典 チャンナ教誡経 片山一良訳)

心を豊かにする美しい悲しみもある。そういう悲しみを無量に悲しみ心を醸成する。慈しみと悲しむ心で。世を治める智慧は仏典には満ち溢れている。貪・瞋・痴によって駆動する今日の社会構造を戒めるブツダの智慧を一人ひとりが自分の生活のうちに実践してゆくことが、おのが身を治め社会の混乱を治めてゆく基軸になってゆくことを深く願うばかりである。

今日の宇宙物理学によれば、この宇宙の周期の基点は百三十六億年前のビッグバンに始まったといわれている。膨張と収斂の連鎖反応なのだろう。仏教では一陣の風のゆらぎから事が起こったという。宇宙の始まりから百億年の時を刻み海底の熱水の噴出口近くで有機化合物が重合することによって原核細胞としての生氣ある微生物が誕生したのではないかと分子生物学者は説明している。以後のことは地質年代が記すようにカンブリア紀、オルドビス紀……ジュラ

紀、白亜紀……と続きわたしたちの生きるこの紀を人新生と名称するようになった。生物の一個体としては容積の大きな七十数億の人類の動向が、この惑星の自然環境に影響を与えていることは確かな事実である。ある生物学者は次のように云う。

この眼前の草焼きや山容の色やかたちは種々の偶然性のアキュムレーションによって、たままこの様に形成したにすぎず、論理的に必然的にこの様になったわけではない。だから、なんらかの自然の突然の要因性が加われれば、また全く異なる自然の現象が顕現されることもある。仏教ではこれを仮現説という。本当のところは、心に生きているのはDNAだ。A君やB君やCさんが生きているというのはたんなる現象面の泡影のようなものだ。

この分子生物学者の弁証も仏教の無我説と通底している。ブツダはいう。わたしが悟ったことは、なんら特殊なことではない。本来、物を成り立たせている道理を現象面にとらわれることなく知ったことなのだ。真理はわたしが在るなしにかかわらずに在るものなのだ、と。

同じ生物学者の弁証によるもう一例を引用する。

ところがネイチャーというのはロジカルじゃないんだ。特に生命現象はロジカルじゃない。

(中略) 生物の世界というのは、何億年にもわたる偶然の積み重ね、試行錯誤の積み重ねで

いまこうなっているということであって、こうなった必然性なんてないわけですよ。

仏教では地水火風の四大が和合して物象が現じ五蘊和合して人の行為が生まれるという。

六十兆個の真核細胞の集積体が人間一個の現象体なのだ。一個一個の細胞は三十六億年の生命の記憶を宿住させて今を生きている。

解剖学者の三木成夫という人は墮胎した胎内の胎児を産科医から譲り受けその胎児を解剖し生命が生まれる過程を研究した稀有の人だが、生命が女性の胎内で生命として結晶して三週間から四期にはいったとき生命は二億数千万年前の爬虫類——三木成夫はハツテリアと呼んでいる——の相貌を見せるといふ。人間の小脳を爬虫類脳とも別称されるそうだが、わたしたちは原核細胞、真核細胞から分化し多様な生命様態を経由した後の人類なのだという認知を自覚して生きることが他の生物、生命への慈・悲の観想を拡大にしてゆくのではないだろうか。

女性は生命を育むために身体の中に海を造化する。人類は六十兆個の細胞神経をシナプスさせ、宇宙の誕生から生命の誕生、生命の分化の過程を憶念することができる。生まれ死ぬ身ではあるけれど、人間は宇宙のひとつの周期を生まれそして死ぬことができる膨大な時間を包摂して生きて存在しているのである。

ブツダはニッバーナに入ったのでふたたび生まれ来ることはない。解脱した人はどうして再

び生まれこないのか、と問われたシャンカラは「解脱した人が再びこの世の生活に帰って来ることがないというのは、その明知 (vidya) によって種子の能力をすべて償却してしまったからである。もしすべての人が解脱を得ることができたら、その時点で全世界は消滅する。」と答えている。

シャンカラのことばは清冽で直感的だ。微塵の曇りもない。シャンカラはヴェーダを究めた哲人だったが、こういう人を崇高なる学徒という。シャーリプトラのような人だ。

明るい春の光のなかを、白牛がゆっくり歩いていっている。草も萌えて：むここの森の中から素裸の聖者が鉢を手に町の方角へ歩いてゆく。一切のいきものを殺すなかれ、殺すなかれ、殺すなかれ、これが聖者の歌：。春の風はそよそよと吹いて。手をつつしみ、足をつつしみ、ことばをつつしみ、最高につつしみ、心を安定統一し、ひとりで満足している。ブツダの風の音に触れると心が静かな喜びにつつまれる。土から水から光輝から風からブツダの声は無量に振り灌いでいる。

ある日、一緒に生きていた犬が死に、そして数時間後には蠅がたかり腐りはじめた。呼んでもふたたび感応をわたしに返すことはなかった。存在することと非存在の隙間は無限小のように人の計器では計れないが、存在と非存在の違いは無限大ほど桁が違う。だから存在を軽く見

てはいけない。後々後悔の思いは桁違いに大きくなる。だから、家族や隣人に常に善の限りを尽くして生きることが仏の道となってゆく。執着を捨て伶俐な風のようにこの世を渡って行く。一人ひとりが宇宙の周期を生きられるように。誕生は生劫期、青年は成劫期、老成は壊劫期、死は空劫期。この無常を体得すればあらゆる苦から開放される筈だ。一人ひとりがブツダの慈と悲を喜と捨をこの身と心に薰習くんじゅうされるように。貪と瞋と痴の大河の向う岸に渡ってゆく。

最期にブツダゴース比丘の清浄への道の論理を記述してこの風文を攔おく。

ウイパサナーの意味にて至る道。

一切諸行は無常なりと慧により見る時、すなわち苦を厭う。

これは清浄への道なり。

禅と慧との意味にて示される。

無慧の者には定なし。定なき者には慧なし。禅と慧とを有する者。

彼は実にニツパーナに至る。

業の意味にて清浄に至る。

業と明と法と、戒と最上の活命（生活）とこれによって人は清まる。

生まれ、財によりては人は清まることはない。

戒等の意味にて示される。

一切時に戒を具足し、慧を有し善く等持し、精進に励み専精なる者は、度し難き瀑流を度る。

不死は得られた。ふたたびこの世に生を受けることはないであろう。この身がこの世で最期の身となるであろう。これがブツダの成道である。

終り

引用図書

- 『仏弟子の告白』 テーラーガーター 中村元訳 岩波書店
『尼僧の告白』 テーリーガーター 中村元訳 岩波書店
『パーリ仏典 中部 (マッジマニカーヤ) 後分五十経篇Ⅱ』 片山一良訳 大蔵出版
『心の治癒力』 チベット仏教の叡智』 トウルク・トンドウツプ著・永沢哲訳 地湧社
『精神と物質』 立花隆・利根川進 文藝春秋